

『恵みがあなたに』

ヘブル人への手紙 13 章 22～25 節

1. ささげる

一般の人々は、宗教と言うと、壮麗な建物、それに伴う祭壇、また、そこに献げる犠牲といったことをイメージします。他宗教から見ると、その当時のキリスト教は、荘厳な神殿で何かをしていたわけではないし、建物の中には祭壇があるわけではないし、祭壇に犠牲を献げる祭司がいて、何かをやっているわけではありません。余りにもシンプルに映ったのでしょうか。9 節で「**様々な異なった教えによって迷わされてはいけません。食物の規定によらず、恵みによって心を強くするのは良いことです。食物の規定にしたがって歩んでいる者たちは、益を得ませんでした。**」とあるように、神に近づくものとして食物に関する取り決めがあるわけでもありません。

キリスト教は本来シンプルですが、神殿とか祭壇がないわけではありません。献げる犠牲もあります。パウロは、エペソ 2 章 20～22 節で「**使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。**」と述べ、また、ヘブル人への手紙の著者は、2 章 6 節で「**ある箇所で、ある人がこう証しています。「人とは何もののなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とはいったい何もののなのでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは。」**と神殿に関しては、目に見える建物がそうではなくて、私たちが神殿であるという真理を告げました。そして、祭壇もないのではなくて、ささげものは、15 節では、「**それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。**」とあるように、有るということを告げています。もちろん犠牲も献げられました。10 節前半には「**私たちには一つの祭壇があります。**」と言っています。「祭壇」とは、神にささげものをする台です。私たちにとってこの「祭壇」とは、何でしょうか。それは、イエス・キリストの十字架です。イエス様は、十字架という「祭壇」に、ご自身を自発的に献げられました。私たちを救うために、罪のきよめのための供え物として献げられました。イエス様は十字架という祭壇で尊い血を流し、私たちの罪のための贖いを成し遂げてくださったのです。このことがなければ、私たちは神に近づくことができませんでした。

2. 忍耐して聞いてほしい

今日で、ヘブル人への手紙の学びが終わります。最後に祝福の挨拶を書き記しています。22 節には、「**兄弟たちよ、あなたがたにお願いします。このような勧めのことは耐え忍んでください。私は手短かに書いたのです。**」とあります。「**このような勧めのことは**」とは、この手紙のことを指しています。この節にある「**勧め**」は、ギリシア語で「慰め」という意味でも用いられます。使徒の働き 4 章 36 節に「**キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、**」とありますが、パウロの同僚バルナバは「**慰めの子**」という意味をもつ名であり、ここでもやはり同じ言葉が用いられています。またこの言葉は、説教を意味する一般的な言葉でもあります。パウロたちがピシデヤのアンテオケで安息日に会堂に行った時のことが、使徒の働き 13 章 15 節に「**律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことはあれば、お話してください。」**」とあります。この「**奨励のことは**」の「奨励」がその例です。

ヘブル人への手紙の執筆者は、ただ「**手短かに書いた**」と言っていますが、実のところヘブル人への手紙は新約聖書の手紙の中では三番目に長いものです。この手紙よりも長い手紙は、ローマ人への手紙とコリント人への第一の手紙だけです。ですから、ここでこの「**勧めのことは耐え忍んでください**」と言っているのです。この「**勧めのことは**」を忍耐して聞いてほしい、ということです。ということは、当時のキリスト者たちの中にも今日の私たちと同様、忍耐に欠けている人たちが少なからずいたということです。いつの時代でも忍耐することは簡単なことではありませんが、大切な真理を身に着けるには、忍耐が必要であることがわかります。

23 節には、「**私たちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。**」とあります。テモテはパウロの第二次伝道旅行の時、ルステラでパウロに出会い、それ以後、パウロの元において訓練した結果、すばらしい働き人として成長していました。パウロが獄中から手紙を書いた時、そのテモテもパウロと一緒に獄中にいたようで、その彼が釈放されたことを伝えています。このことから言えることは、テモテがこの手紙の著者と親しい関係であったということです。キリスト者同士、喜びも悲しみも共に共有できることは大きな特権であると言えます。

3. 恵み

24～25 節には、「**あなたがたのすべての指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく。イタリアから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。恵みがあなたがたすべてとともにありますように。**」とあります。「**恵みがあなたがたすべてとともにありますように。**」とありますが、この「**恵み**」という言葉は、このヘブル人の手紙における強調点の一つでした。なぜなら、彼らがキリストから離れてかつてのユダヤ教に戻って行ったのは、この「**恵み**」を忘れていたからです。だから最後に「**恵み**」をもう一度強調しているのです。それは私たちも同じで、「**恵み**」を忘れてしまうと信仰のバランスを崩してしまうことになります。というのは、「**恵み**」を忘れると「**行い**」に走ってしまうからです。「**行い**」に走っていけば、律法主義に陥ってしまいます。律法主義に陥ると人を裁くようになります。自分と同じようにしていない人に対して苦々しい思いを抱くようになるのです。自分はキリスト者としてちゃんと生きているのに、どうしてあの人はしないのだろうと人を裁くようになるのです。「**恵み**」を忘れていたからです。

① 受けるに値しない者が受けること

「**恵み**」とは、受けるに値しない者が受けることです。神の「**恵み**」を受けるにはふさわしい者ではないのに、神がキリストを与えて救ってくださいました。これが「**恵み**」です。それはあなたが立派な人だから、何か特別なことができるから、まじめに生きているからではなく、そうでないにもかかわらず、神はあなたを愛してくださいました。これまでずっと自分が捕われていたことから解放していただいたのです。そうであれば、人がどう見ているかではなく、大切なのは、神があなたのことをどのように思っておられるかということです。そうすれば、すべてのものから解放されます。そして、どんな問題も乗り越えることができるのです。

② 無償

「**恵み**」というのは、何の働きも行為もない者に、無償で与えられるもののことをいい、対義語は「報酬」です。ローマ書 4 章 4 節に「**働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。**」とありますが、もしあなたが仕事をして報酬を得るとしたら、それは「**恵み**」ではなく、当然受け取るべきものとなります。ところで「**恵み**」というのは、受ける側は無償で与えられるのですが、それを与える人は大きな犠牲を払わなければなりません。私たちにとって一番の高価なものは、「人の命」です。例えば、親は子どもが誘拐されたら全財産を使ってでも、その命を救出しようとするでしょう。そして、詩篇 49 篇 8 節では、「**たましいの贖いの代価は高く永久にあきらめなくてはならない。**」と言っていますが、地上の命よりもはるかに高価なものが「**たましいの贖いの代価**」です。これは高価過ぎて、私たちは永久に諦めなくてはならないほどのものです。

パリサイ人は自分の正しい行為によって、自分の魂を神の前に贖おうとしました。また、昔の人々はお金を払って免罪符を購入することによって、罪の赦しを得ようとしていました。しかし、それらによっては誰も救われることがないということをご存じだったイエス様は、汚れないご自身の尊い血によって、私たちを贖ってくださいました。

ペテロはそのことをペテロ第一 1 章 18～19 節で「**ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。**」と明確に宣言しています。全世界を造られた主は、その「英知」と「**恵み**」によって太陽や雨を私たちに与えてくださっただけでなく、ご自身の尊い命によって、あなたのために「たましいの贖い代」を払ってくださいました。そのために主は、ゲツセマネで苦しみもだえ、汗が血のしずくのように地に落ちるほどに祈られ、十字架の上では全身から血を注ぎ出して息を引き取られました。それほどの犠牲と代価を払って、主はあなたを贖わ

れたのです

神は、許されるには値しない私たちにイエス・キリストを与えてくださいました。私たちが救われたのはただ神の「恵み」によるのです。この「恵み」があれば、どんな迫害があっても、どんな問題が起ころうとも、必ず乗り越えることができます。すべては「恵み」です。主は「恵みの上にさらに恵みを」与えてくださる方であり、私たちにはすでにその「恵み」が与えられているし、常に与え続けられています。ですから、困難を感じる時には、そのことを思い起こしてほしいと思います。

4. 恵みを覚えて感謝する

人間は、自分にとって良いと思えることしか「恵み」と感じ取ることができない身勝手な存在です。しかし、神の「恵み」は、良いと思えることも、悪いと思えることも、辛いことも、嬉しいことも、全てのことに於いて、示されるものです。なぜなら、神はそうした全てのことを働かせて、益としてくださるからです。

ヨシュア記 15 章には、ユダ族がくじでイスラエルの南の地帯を相続地の割り当て地が与えられたことが記されています。せっかく最初に相続地の割り当て地を与えられたというのに、一番ひどい所が与えられました。イスラエルは北部によく肥えた緑の地が多く、南部に行けば行くほど岩や砂が多い荒地となっているのです。彼らが引き当てた地は最も環境が悪く、住むのにも適さない、農耕にも適さない、荒地だったのです。おそらく彼らは「運が悪いなあ」と思ったことでしょう。しかし、そのような所であったがゆえに、彼らは偶像崇拜の悪しき影響から免れ宗教的な純粋さを保つことができたのです。北部の肥えた地は、確かに環境的には申し分がありませんでしたが、それに伴って農耕神、豊穡神と呼ばれるバアル宗教がはびこっており、こうした偶像との戦いを強いられることになったからです。それゆえに、やがてイスラエルの北はアッシリヤに滅ぼされてしまうことになります。それに対してユダ族は、こうした環境的困難さの故に、唯一の神、主の信仰から離れることなく、常に純粋な信仰を保ち続けることができました。それだけではありません。この環境的困難さによって、ユダ族はさらに強くたくましい民族へと育て上げられて行きました。そして南イスラエルは、「南王国ユダ」と呼ばれるまでになったのです。すなわち、このユダ部族が南に住んでいた全部族を代表して呼ばれるほどに、強力な部族になっていったということです。

時として、私たちは、自分が望まない困難な状況に置かれることがあります。そこにも神のご計画と導きがあるのです。ですから、自らの不遇な状況を嘆いて、自己憐憫になってはいけません。むしろ、その所こそ、主が私たちに与えてくださった場所だと信じて、主を賛美しなければなりません。このように、自分の置かれている状況と全く関係なく、そこに生きて働いておられる神の「恵み」を覚えて感謝することができるということがキリスト者に与えられている特権であり、信仰の醍醐味なのです。

新聖歌 172 番に、「望みも消え行くまでに」という讃美がありますが、この中には「数えてみよ、主の恵み」と歌われています。この歌の題は、「Count your blessings」です。文字通り、「あなたに賜った恵みの一つ一つを数えなさい」という意味です。詩篇 103 篇 1～5 節に「わがたましいよ【主】をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ【主】をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主はあなたのすべての咎を赦しあなたのすべての病を癒やしあなたのいのちを穴から贖われる。主はあなたに恵みとあわれみの冠をかぶらせ あなたの一生を良いもので満ち足らせる。あなたの若さは鷲のように新しくなる。」とあります。この歌は、この 2 節の「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」が元になっていますが、この讃美によって、どれほど多くの人が生きる希望を与えられたことでしょう。

「恵み」とは、聖なる神が与えてくださるもので、私たちは、それを受ける資格のない罪人ですが、それでもくださるのです。使徒の働き 17 章 25 節は「また、何かが足りないかのように、人の手によって仕えられる必要もありません。神ご自身がすべての人に、いのちと息と万物を与えておられるのですから。」と語ります。次のひと呼吸さえ神の賜物です。どれほどつらい時でも、神は力をくださるので、私たちは耐えていくことができます。

ペテロ第一 5 章 12 節に「忠実な兄弟として私が信頼しているシルワノによって、私は簡潔に書き送り、勧めをし、こ

れが神のまことの恵みであることを証しました。この恵みの中にしっかりと立っていなさい。」とあります。神の「恵み」は、私たちが罪から救ってくださったばかりでなく、あらゆる「恵み」に満ちたものです。これが神の「恵み」であり、真の「恵み」です。それは良いことばかりでなく、時には喜び、時には苦しみ、時には耐えがたいと思えるような試練もあるでしょうが、しかし、それらすべてを働かせて益としてくださる「恵み」、それが神の「恵み」なのです。ここではそれを「神のまことの恵み」と言っています。神の「恵み」は「まことの恵み」です。それは朝毎に新しい「恵み」です。私たちにはそのような「恵み」がもたらされていることを覚え、この「恵み」を一つ一つ数えながら進んで行きたいと思います。

では、このような神の「恵み」が与えられている私たちは、どうあるべきでしょうか。12 節後半には、「恵みの中にしっかりと立っていなさい」とあります。「神のまことの恵み」の中に入れられた者は、この「恵み」の中に、しっかりと立ってなければなりません。しかし現実には、この「恵み」の中にしっかりと立っているということがどれだけ困難なことであるかを、私たちは実際の生活の中で嫌というほど経験しています。イエス様を信じているためにこんなに苦しい思いをするのなら、いっそのこと信じることを止めてしまった方がどれほど楽なことか思ってしまうのです。また、世俗化との戦いもあります。悪魔は絶えず私たちに「現実」という二文字をちらつかせては、信仰に堅く立つことが馬鹿らしいように思わせます。そして、この世にある様々な誘惑を通して信仰をゆがめ、さらに信仰から離れてさせようと襲いかかってくるのです。現代の社会は、特にこうした傾向にあります。

ですから、この「恵み」の中にしっかりと立っていることは容易いことではありません。だからこそ、私たちがしなければならないことは、この「恵み」の中に留まっているようにと頑張ることではなく、神の「恵み」がいかに大きなものであるかを心に止めることです。神は、こんな罪深い者をあわれんでくださって、愛する御子を十字架にまでかけて救ってくださったということを信仰によって心に刻み付け、いつも思い起こさなければなりません。だからこそ、私たちはどのような時にも、「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。」（ヘブル書 12:2）でいなければならないのです。

エレミヤは、神のさばきによってユダとエルサレムがバビロンによって滅ぼされた時、その激しい苦しみの中で、哀歌 3 章 21～25 節で「私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。【主】の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は大です。【主】こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。【主】はいつくしみ深い。主に望みを置く者、主を求めるたましいに。」と言いました。私たちが強情でわがままな時も、神は時間を与えて主に立ち返るように助けてくださいます。エレミヤが、神のさばきのただ中でも、主を待ち望むことができたのは、彼に降り注がれている主の「恵み」の大きさを知っていたからです。「主のあわれみが尽きない」という信仰があったからです。それは朝毎に新しいということを体験していたからなのです。

それは私たちも同じです。どんなに頭でわかっているとしても、私たちは本当にもろいものです。すぐに躓いてしまいます。しかし、そのような中であってもこの「恵み」に立ち続けていくことができるかどうかは、尽きない神の「恵み」、朝毎に新しく注がれる主の「恵み」に留まっているかどうかで決まるのです。

主の「恵み」は尽きることがありません。それは「まことの恵み」です。今日は恵んでも、明日はわからないというものではありません。あなたを滅びの穴から救い出してくださった主は、最後まであなたに「恵み」を注いでくださいます。だから、私たちもこの「恵み」の中に、しっかりと立ち続けようではありませんか。

イエス様は、ヨハネの福音書 14 章 27 節で「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」と言われました。最悪の状況にある時でも、神が支配しておられるので、私たちは安らかな心でいられます。私たちには生涯、主のために生きる「恵み」とあわれみと平安が与えられます。それで私たちは励まされます。

全てを忘れてもこの「恵み」だけは忘れないでください。この「恵み」が、あなたがた全てとともにありますように。神の「恵み」のうちにこのヘブル人への手紙を終えることができることを感謝したいと思います。